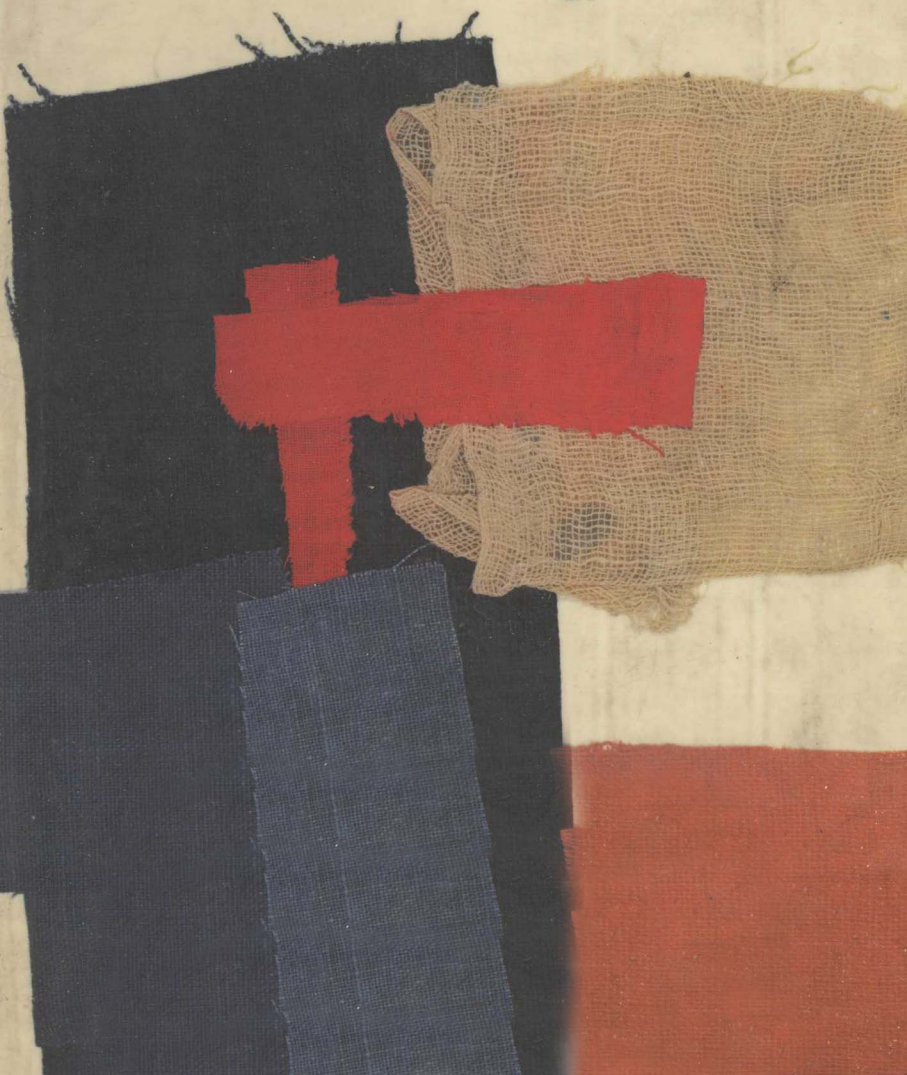


# 夜の傾斜

船山 静香



# 以の傾斜

船山敬著小説全集

第四卷

河出書房新社

船山馨小説全集 第四卷

昭和五十年十二月十日 初版印刷  
昭和五十年十二月十五日 初版発行

著者 船山 馨

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

振替口座(東京)一〇八〇二 電話二九二一三七二一

印刷 多田印刷

製本 小高製本

©1975 KAORU FUNAYAMA

定価はカバー・帯に表示してあります

目次

夜の傾斜

5

解説・荒正人

370

装帧

佐野繁次郎

船山馨小説全集 第四卷



# 夜の傾斜





## 第一章 獵銃

山の上で銃声がした。

麻生康子は胸のあたりまである熊笹の繁みのなかに立ちどまって、顔をあげた。銃声は山を覆うツガの林に木魂して、眼下に冷たい色をたたえた沼のほうへ、尾を引いて消え、それっきり、周囲は深い静寂にかえって、物音は絶えた。

康子はそのままの姿勢で、遅れて登ってくるいづみを待った。

十一月なかばとはいっても、標高二千メートルにあまる奥日光では、秋より冬に近い。葉の散り落ちた木々の黒い梢が山々をつつみ、背後に聳える白根の連峰や、遠く木の間がくれに見下す戦場ヶ原も、いちめんに黝ずんで、すみ絵のように烟っている。ただ、空だけが、抜けるように青かった。

笹の鳴る音がして、うすあかく頬を染めたいづみが、繁みをかきわけながら追いついてきた。いづみはジャンパーを脱いで、脇にかかえていた。生え際のくつきりした、理

知的な感じの白い額に、汗の粒が光った。

「鉄砲の音がしたわね、いま」

手の甲で額を拭きながら、いづみがいった。

「誰か、つぐみでも撃っているんでしょ」

「鉄砲の音って、へんに淋しいものね。あんまり好きじゃないわ」

「どうせ、うちのお父様なみの横好きよ」

康子は声をたてて笑いながら、肩に提げたバッグから、ウイスキー・ボンボンの袋を出して、いづみの手に握らせた。

「温泉平でやすんだら引返すわ。もうすぐよ」

「まだ平気」

いづみも白い歯を見せて、にっこりした。

この娘は笑うと、かえって淋しそうな顔になる——と康子は思った。

学生のころから山歩きに馴れている康子とちがって、湯の湖から三時間たらずの登りでも、いづみにはかなりこたえているに違いなかったが、それでも弱音をはかない芯の強さも、彼女にはあった。自分の妹ながら、気弱なのか剛情なのか、ほんとうは康子にもわからない気がしていた。ややしばらく、二人は笹原をならんで登っていった。

太郎山が眼前に迫るあたりまでできたときであった。ふいに、足もとをうしろの笹藪のなかへ、風のようにかすめ飛ぶ白い影が、視界をよぎって、思わず二人は立ちすくんだ。背後で、鳥の舞い立つ羽音がした。

白い影が、ポインター種の猟犬であることは、反射的に康子の意識にきたが、振り返ることはできなかった。二間と離れない眼前に、一人の男が、鈍く光る銃口を彼女の額のあたりへ向けたまま、身じろぎもせず立っていたからである。

その男が、犬の追いついた鳥を撃とうとしていたのは確かであった。しかし、不意のことではあったし、距離があまりに接近していたので、自分が狙われているような錯覚が、康子をとらえたのも無理ではなかった。そのうえ、相手は康子たちに気づいてからも、すぐには銃を構えた姿勢を崩そうともしないのである。狩猟家の作法にはないことであった。

束の間の恐怖が去ると、胸の青ざめるような腹立たしさがこみあげてきて、康子は銃口に向って、いどむようにひと足踏み出していた。

「どこをねらっていらっしゃるの」

たたきつけるような、激しい口調であった。

男は銃を構えたまま、じっと康子を見つめていたが、やがて、ゆっくり銃身から顔を起こして、

「失礼」

と、太い冷たい声でいった。

詫びているような気配ではなかった。なんの表情もない、むしろ傲慢な口調であった。

しゃれた狩猟服に、山歩きには贅沢な薄茶のツイードの

ズボンで、ズボンとおなじ生地地のハンティングを、すこし眼深かにかぶっている。四十近い年配だが、肩幅の広い、がっちりした体つきの男で、きつく結んだ唇と、濃い眉のしたの、冷たい光りかたをする二つの眼が、ひどく印象的であった。

「殺されるのかと思ったわ」

康子はたたみかけるようにいったが、もう男はそれにとたえようともしないで、狩猟服のポケットから煙草を出して、薄い唇にくわえた。

康子の眼が、相手の猟銃にとまった。

特徴のある、冷たく優美なつくりが、日本では珍しい北イタリー製の、最高級の自動五連銃であることは、猟好きの父の麻生達之助の仕込みで、彼女にはひと眼で見わけがついた。康子には良質の銃を見ただけで、一種の陶醉を誘われるような、心の習性があるのだった。

「ルイジ・フランキね。あなたみたいな藪腕みにはもったいないわ」

ずけずけという康子のうしろで、いづみが忍び笑いを洩らした。

男は興味を感じたらしく、ライターをすりながら、ちらりと眼をあげて二人を見た。

「くわしいですね。お好きですか」

「あなたよりは、わたしの腕のほうが確かかもしれないわ」

康子は無遠慮に答えたが、腹立たしさはいくらか薄れて  
いた。

ルイジ・フランキのせいかもしれない——

彼女は美しい銃の姿に眼をあてながら、そう思った。

犬が戻って来て、不思議そうに主人を見上げた。せつかく  
追い出した獲物を撃たなかったのが、不満そうであった。  
「一度だけ、わたしに撃たせて。それで、あなたの無作法  
を忘れてあげます」

「許可証はあるんでしょうな」

「ないように見えて？」

康子は相手の銃をとりあげて、犬に合図をすると、もう  
先に立って歩き出していった。

いづみが男と一緒に、とり残されたかたちになった。

「ご姉妹ですか」

男は康子の後姿に、無表情な視線をあてながら、なかば  
独り言のような、気のない口調できいた。

「ええ、姉です」

「なかなか面白い」

「なにがですか？」

「お姉さんのことですよ。猟でも、美しいうえに闘志のあ  
る獲物には興味をひかれるものです」

「失礼ですわ、そんなおっしゃりかた」

いづみが抗議したが、男は応えようともしなかった。

彼は唇の端に、煙草をぶらさげたまま、ゆっくり、繁み

のなかを歩きはじめた。ほの暗いツガの林のなかで、つづ  
けざまに銃声が二度鳴った。

「失敗らしいですな。口ほどお上手じゃないらしい」

男はいづみを振り返って、片頬に薄い笑いをうかべた。  
笹藪を抜けて、林のなかへ入っていつてみると、康子は  
両手で銃を水平に提げて、唇を噛んで梢の一角を睨んでい  
たが、振り向くと、声をたてて笑い出した。

「思い知らしてあげようと思ったのに、これじゃ、どん栗  
の背くらべね。仕方がないから、いずれ劣らぬ藪脱みとい  
うことにしておきましょう」

「光栄ですな」

男は銃を受けとりながら、足を停めずに、康子の前を通  
りぬけた。歩きながら、弾帯をさぐって、弾丸をこめ直し  
た。

それ以上、康子もいづみも、その男についてゆくつもり  
はなかったが、彼女たちが帰るのとおなじ方向へ、彼も歩  
いていた。

樹林のなかの、しめった細い山径を、二十分あまりも降  
りたとき、先に立っていたポインターが立ちどまった。左  
の四肢をわずかに地面から浮かして、前方の繁みに頸をの  
ばしたままの姿勢で、微動もしない。

男はゆっくり銃床を肩に押しあてた。

猟犬は一、二度短く尾を振って、主人に合図を送るや、  
繁みのなかへおどり込んだ。

高い羽音とともに、一羽の雉が空へ舞い立ったのと、男のルイジ・フランキが火を噴いて鳴ったのが同時であった。鳥は繁みのなかに落ち、銃声の余韻のなかで、むしれ飛んだ羽毛が、青い空をゆるく舞った。

「やった！」

康子は小おどりした。

しかし、どうしたのか、帰って来た犬は獲物をくわえていなかった。

男は犬をとがめようともしない。射止めた獲物のことなど忘れたように、そのまま、黙々と山径を降りてゆく。

康子は足を早めて彼に追いつくと、あきれ顔でいった。

「たいへんな犬を連れていらっしやるのね。獲物を運ぶことも知らない猟犬なんて、はじめて見たわ」

「忘れさせたのです」

「まあ、なぜ？」

「その必要がないからです」

男は抑揚のない、沈んだ声でいった。

康子の眼に、未知の獣を見るような光が宿った。

「仕止めた獲物に用はないとおっしゃるのね。じゃ、なぜ猟をなさるの」

「殺すため、とでも答えておこうかな」

「ただ、殺すために殺すだけ？」

「残酷ですか」

「わからないこともないわ。でも、ずいぶん動物的ね」

男はおなじ歩調で歩きつづけながら、提げていた銃を肩にかついだ。

「私は仕事の仕上げをする前には、いつも、こういう遊びをすることになっているが、氣力を充実させる効果はある」

「どんなお仕事なさっていらっしやるのかしら。なんだか、屠殺屋みたいに聞えるわ」

康子はいたずらっぽく、肩をすぼめて笑ったが、男の顔には、なんの表情もうかばなかった。

「似たようなものだね」

彼はぼつりといった。低い声ではあったが、なにか傲然としたひびきが、そのなかにあった。

金精峠の山小屋を過ぎて、ガラ沢の急斜面を下ると、湯元の温泉町が眼の下に見えはじめた。金田峠へのわかれ道から少し降りたあたりで、男は足を停めて振り返った。

「あれが私の小屋だが、よかつたら、休んでおいでなさい」

ゆるい山腹の、ブナの林のあいだに、イギリス風の二階建の山荘が、赤い屋根を覗かせているのが見えた。

「君子は危うきに近寄らずっていうわ。標的になるのは一度でたくさんよ」

「別れの挨拶にしては手きびしいね。じゃ、失敬」

男は薄笑いをうかべると、勢いづいて走り出した猟犬の後から、林の中へ入っていった。

「さようなら、屠殺屋さん」

康子がその後姿に声をかけたが、男は振り返らなかつた。

「変った人ね。いったい。何者かしら」

「お姉さんて、向う見ずね」

いづみはほっとしたように微笑した。

湯元のホテルへ帰りつくと、出迎えた女中の声が、不安そうにこわばっていた。

「東京からお電話がございました、なんですか、お父様が急に御病気とかで、すぐお帰りになるようにとのことでございます」

「父が病気ですって？」

康子は怪訝そうに訊き返して、いづみと顔を見あわせた。父の達之助は瘦せてひよわそうに見えはしたが、若い頃から、ほとんど病氣らしいものをしたことがなかつた。二、三カ月前から会社の経営面に、なにか問題が起っているらしく、いくらか憔悴気味で、気難かしくはなっていたが、健康を書している様子はなかつた。一昨日の朝、仕事で大阪へ発つときも、変ったところはなく、むしろ、いつもより元氣なくらいであった。康子はいづみと一緒に、自分で車を運転して、達之助を羽田まで送ってゆき、その足で、奥日光の秋色を探りにきたのである。

どんな病氣なのか、かいてもく察しもつかなかつた。しかし、康子たちを呼びもどすところをみると、軽いものとは思えなかつた。

車を玄関へまわすように頼んで、部屋で帰り支度をしてるあいだにも、不安はつのるばかりだった。

「いやだな、なんだか胸騒ぎがするわ」

着換や下着を手あたり次第に、スーツケースに詰めこんでいた手をとめて、康子がいった。

いづみはベランダに立って、水面に薄い湯煙のただよう湖を見下していたが、彼女も不安な思いを抑えかねているようであった。

「家へ電話してみるわ。急報なら、いくらか時間かからないでしょ」

思いつめたような表情で、いづみは振り返った。

「そうね、フロントに訊いてみてちょうだい」

康子も、少しでも早く様子が知りたかつた。

いづみはうなずいて、電話のほうへ歩み寄つたが、受話器をとろうとすると、向うから呼び出しのベルが鳴った。

「東京からでございます」

ホテルの交換台が告げた。

「家かららしいわ」

いづみは姉に聞いて、耳を澄ました。

「もしもし……ああ、いづみ？ 康子もそこにいますね。

すぐ、帰ってきて……」

母の篠江であった。

雑音がひどくて聴きとりにくかつたが、度を失っておろしている様子は、声でわかつた。

「お父様が御病気ですって？ どうなさったの？」

「大変なことになってしまつてね……。お父様が……」

「大変なことって？ はつきりおっしゃって？」

「今朝、自殺を……」

「えっ！ なんておっしゃって？ 自殺？」

いづみが悲鳴のような叫び声をあげた。

康子は受話器をもぎ取った。

「お母様、康子です。お父様がどうしたとおっしゃるの？」

「今朝、猟銃で、胸をお撃ちになつて……」

一瞬、康子は息をのんだ。自分の耳が信じられなかつた。

「それで、どうだったんです。助からなかつたんですか？」

「どうしていいんだか、わたしひとりで……。なんにもわからぬのよ、気が転倒してしまつて……」

篠江の声は、なかばうわ言じみていた。それが嗚咽で

れぎれになるので、ほとんど聴きとれなかつた。

「わたしたち、すぐ帰ります。しっかりといらつしや

なけりや駄目よ、お母さま」

康子は氣をとり直して、篠江を励ますと、電話を切つた。

いづみは口もきけない様子で、もの問いたげな青ざめた

眼差で、姉を見つめて立ちつくしていた。

「とにかく急ぎましょう。お母さま興奮していらつしや

から、電話じゃよくわからないわ」

康子はいづみをせきたてた。

二人は支度をする間もどかしく、部屋を出ると、廊下

を小走つた。

荒原とした戦場ヶ原の高原を、康子の運転する自動車は、

憑かれたようなスピードで駆け抜けた。

さざなみ立った中禅寺の、暗い色の湖畔を過ぎるころに

なつても、二人は言葉を失つたままでいたが、ふと、いづ

みが腕時計を見て、ラジオのスイッチを入れた。

ニュースが流れはじめた。

二人は硬張つた視線を手に据えながら、父の名を待つ

た。

「……旭光製糖社長麻生達之助氏が、今朝八時五十分ごろ、

自宅二階の書齋に鍵をかけ、愛用の猟銃で左胸部を撃つて、

自殺をはかりました。いまのところ原因は不明ですが、最

近、立石産業社長立石俊輔氏によつて、ひそかに旭糖株の

大幅な買占めが行われていたことを知り、その善後策に

苦慮していたといわれ、株主総会を一週間後にひかえて、

対策に窮したすえの、責任感からではないかと見られてい

ます。現在、危篤状態のまま、自宅で加療中ですが、生命

は絶望視されています。麻生氏は旭糖の現会長魚住祐三郎

氏に認められて、今日を成した魚住氏子飼いの事業家で

……」

アナウンスは感情のともなわぬ事務的な口調で、達之

助の経歴を読みつづけていた。危篤ということではあつた

が、すでに死者の扱いであつた。

いづみはふるえる指でスイッチを切つた。

「いづみちゃん、いいわね、しつかりするのよ。わたしたちがしゃんとしていないと、お母様どうかなくなってしまわ」

いろは坂の曲りくねった急勾配を、ほとんどスピードをゆるめずに飛ばしながら、康子はいった。

いづみは車窓に眼をあてたまま、かすかにうなずいただけであった。

自動車は東京へはいるころには、暮れやすい秋の陽射しは落ちて、濃い夕靄の降りた街に、うるんだ灯りが眼ばたきはじめていた。

代々木上原の高台を登りつめて、わが家の前まで来ると、変事はようやく動かしがたい現実感をともなうて、康子たちの眼に映った。いつもは静かな門内に、何台もの自動車が停まっていた。新聞社の旗を立てた車もまじっていた。

そのあいだを、人影が忙しげに行き交った。

康子といづみは、植込みの手前に車を乗り捨て、玄関のポーチへ小走った。何人かの男が駆け寄り、フラッシュが明滅したが、二人はなかなば夢中で、そのなかをすり抜けた。広間やテラスや廊下にも、人が群れをつくっていた。あらかたは、見知らぬ人のようであった。康子の視線は、それらの人びとのなかに、矢代を求めてさまよったが、彼の姿はなかった。

奥から、秘書の戸坂泰三が急ぎ足に出てきた。女のようない白い額に、ふた筋三筋頭髪が垂れ、派手な色のネクタイ

が、心もちねじれていた。いつも、嫌味なくらい身なりを崩さない彼にしては、めずらしく取乱している感じであった。

「お母様はどこ？」

家じゅうの視線が鳴りをひそめて、自分といづみに集まっているのを意識しながら、康子はきいた。落ちつこうと努めてはいたが、胸がうわずって、語尾のふるえるのが自分でもわかった。

「お待ちかねでした。お二階です」

戸坂は康子といづみの背中に、いたわるように、そっと手をまわす仕草をしながら、沈んだ声で応えた。

いづみが彼の脇をすり抜けて、階段を駆けあがった。

「お父様は？」

いづみのあとから、戸坂とならんで階段をのぼりながら、康子は彼の表情を読んだ。助かるのか——と訊くつもりが、咽喉がつまって、声にならなかつた。戸坂は縁なし眼鏡の奥に、沈痛な色をうかべたまま、応えようとしなかつた。

書斎とならんだ日本間から、すすり泣きが洩れていた。

篠江がもつれるような足どりで出て来て、康子を見ると、袂で顔を覆った。

「遅かったよ、康子。つい、さっき……」

康子は胸に崩れかかる母の肩を、そっと押しやりながら、部屋の入口に立った。



達之助は北枕に寝かされて、そのまわりに、何人かの男女がうなだれていた。医者や看護婦の姿もあった。しかし、枕もとに置かれた経机から、ゆるく立ちのぼる香煙のなかで、すでに、彼等はなんの意味もない存在になっていた。

康子はいづみとならんで、長いこと父の顔をみつめていた。達之助の顔は、一昨日の朝、羽田で別れたときよりもむしろ柔和で、生き生きとして見えた。静謐と、一種の充足の気配すら、そこにはあった。

だが、その印象は、東の間に彼女の胸から消え去った。死んだ者に、なかがあろう。静謐も充足も、生きている者だけのもので、死者はすべてを奪われているから、死者なのではないか。なにかがあるように思ったりするのは、生きている者の、感傷がうみ出す錯覚でしかないはずであった。

父はすべてをむしりとられ、無意味な空っぽの物体に変えられて、眼の前にほうり出されているのだ——という実感が、骨のきしむような憤りで、康子の心を驚擱みにした。子煩悩な、優しい父親だった達之助の思い出が、いちどきに胸もとにあふれてきた。

うしろで篠江の鳴咽がしていた。いづみも唇を噛みしめて、声を洩らすまいとしていたが、スカートの膝に、時折り、涙がしたたりおちるのを、そっと指の腹で拭いていた。

しかし、達之助の死顔を見つめる康子の眼は、いつまで

も乾いたままであった。その眼には、胸の奥を吹きぬける、荒れた風の匂いがあった。

「父の胸を、見せてくださいませんか」

ふと、康子は医者をかえりみて、静かにいった。

「父が撃った、傷を見ておきたいんです」

「いけません。ご覧ならんほうがいいです」

医者の声に、狼狽の色が走った。

だが、そのときには、すでに康子の手は、達之助の合掌した胸にのびていた。

まわりから、いくつかの軽い叫びが洩れたのと、彼女の五本の指が、達之助のガウンの襟を擱んで、無造作に手もとへ引いたのが同時であった。

達之助の瘦せた胸を、厚く覆った白い繻帯の一点に、ぼつりと浮んだ暗紅色のしみが、雪の上に散り落ちたひとひらの花弁に似て、人びとの眼を灼いた。

「お姉さん、なにをなさるの」

いづみが康子の手をおさえて、涙声でいった。

すこしの間、康子の眼は吸いとるように、そのしみを凝視した。それから、ガウンの襟をもとへ返して立ち上ると、無言のまま、しずかに部屋を出た。

康子は部屋つづぎになっている達之助の書斎へ入ってゆき、うしろ手に扉をしめ、そのままの姿勢であたりを見まわした。